

山瀬さま、まおさま、松中さま

心に残るご講義を自宅で同時受講させていただきました。ありがとうございました。
私にとって LGBT という存在はいつも身近なもので、この夏も、知り合いの音楽家の男性が紹介してくれたパートナーはハンサムな若い芸術家でした。
私の実感なのですが、LGBT の方たちは音楽や演劇などの分野で独特の感性で良い仕事をなさる方が多いのではないかと思います。

唐突ですが、私は、もしもビートルズがいなかったら随分とこの世はつまらなかったのではないかと本気で思っている人間です。
そしてイギリスの片隅の一貧乏バンドとして終わることなく彼らが世に出ることができたのは、名伯楽、ブライアン・エプスタインの存在があったからこそでした。日本で 1969 年に出版された《ビートルズ》(ハンター・デイヴィス著)の中には「ブライアンは陽気 (gay の訳なのでしょう) な男であった」という表現があり、オープンな表現が許されなかった当時の翻訳者の苦勞のほどが忍ばれます。

裕福なユダヤ人の事業家であった 27 歳のエプスタインが全く世界の違う粗野で野卑ですらあったビートルズの売り出しに必死になった原動力はジョン・レノンへの恋心だった、と言われていました。
ジョンはそれを薄々知りながらもこれを無視、けれどジョン自身もスチュアート・サトクリフという無名時代のバンド仲間にやや屈折した愛情を持っていたとも言われています。
そのスチュアートはハンブルグ公演の際、ビートルズカットはじめ数々の示唆を与えることになったアストリッド・キルヒヘアという女性フォトグラファーと恋に落ちドイツに残り、間もなく脳腫瘍で死ぬのですが・・・スチュアートとジョンの微妙な間柄のことについてアストリッドが数年前のイギリスのテレビ番組で少し言及していました。
そのアストリッドはいまズピアンとして生きています。

高坂に《ビートルズ話》をさせると夜が明ける、と周りにはかなり評判が悪いのですが、12歳の私がビートルズに出会えたのは LGBT の方々がいてくれてこそ、と思うと、感謝してもしきれない思いです。

みなさまもそれぞれご自身の感性を活かしてお仕事・勉強に取り組んでいらっしゃると
思います。これからもますますご活躍くださいますことを願っています。

高坂みさ子